

金沢第九師団工兵第九連隊

金

沢歩兵第七連隊が明治明治二九年に第九師団に編成変えになるが、師団とは陸軍の軍隊単位で兵員約一万人で、歩兵旅団や（旅団は歩兵連隊2つ）工兵、砲兵、騎兵、輜重兵などで構成されている。金戸からは品川正吉・江久吉・盛田正吉・北山清一・江徳太郎・盛田正一が工兵・砲兵・輜重兵として入隊している。

盛田正一が戦地へ送られてくる『城端時報』お札の葉書がある。

「只今は敵の大軍に三方より包囲され、敵の夜襲を再三再四うけました。昨夜も夜襲をうけ、敵の包囲下にこの手紙を書いていのです。が今ここへ戦友が小原節をうたひながら踊りつつ訪れて来ました。なんといふ潑刺たる情景でせうか、この元氣この頑健で日ならずして敵陣を突破することです。度々時報おくり下された感謝いたす次第です。末筆乍ら皆様方の御健勝をお祈り申し上げます」

富山連隊史

第九師団歩兵第三十五連隊

富

山連隊と言えは金沢第九師団隷下歩兵三十五連隊だが、第二次世界大戦以後は三十五連隊以外に様々な師団や連隊が編成され、満州・南方・北方へと派遣されている。

第九師団歩兵第三十五連隊は一番に歴史があり日清戦争・日露戦争・上海事変・北支事変・支那事変へと事ごとに参戦して精鋭無比とうたわれた。しかし第二次世界大戦においてはほとんど戦火を交えず終戦を迎えている。輝かしい武勲を持ち「武」兵団と呼ばれていたが逆に第二次世界大戦では確たる武勲のなく「悲劇の師団」とも云われた。第二次世界大戦では関東軍として満州に移駐していたが、戦局の変化により昭和十九年の戦争末期には沖繩に駐屯し、さらに台湾の防衛配置についている。不思議にも戦局悪化し制空権・制海権のない昭和十九年の七月には沖繩本島に全船無事に上陸し、十二月には台湾に転進したときも無傷で入港している。他の師団・連隊が多く沈められているのに朝鮮半島からの転進、沖繩への転進、再び台湾への転進中に一度も敵潜水艦の魚雷攻撃も受けて敵機の空襲にもさらされず奇蹟にも

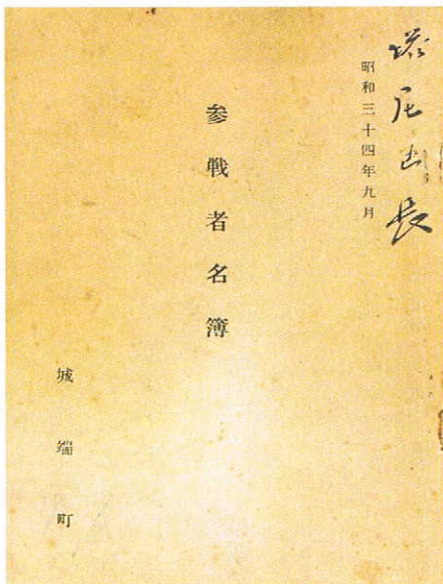
等しいかったが、高桑義輝が従軍し中国大陸で戦死している。

第五十二師団歩兵第六十九連隊

昭

和十五年九月に第九師団が満州移駐したので、新たに金沢に第五十二師団が編成され、富山には大正十二年に軍縮で廃止されていた第六十九連隊が再編成された。この連隊が昭和十八年九月に南方のトラック島へ派遣される。この連隊は悲劇の連隊であり金戸の村人も従軍し出港した船団が殆ど魚雷攻撃を受けて沈没している。島島俊雄と一緒にトラック島へ向かった中仙道政夫も魚雷攻撃を受けて戦死している。

町史編纂時に調査された名簿



独立混成第九旅団とシベリア抑留

昭和十九年に関東軍の精銳現役部隊である第九師団などが沖縄や南方に転出して以来、満州にはいわゆる根こそぎ動員により、開拓団や在滿邦人がすべて動員されて数の上では二四個師団と独立混成第九旅団を基幹として、約七〇万の大兵団を擁していたが、形だけであり兵器も弾薬も少なく、訓練も十分にできていなかった。昭和二十年八月九日のソ連の参戦に抗する戦力もなく、小戦闘を繰り返しながら後退を続けるばかりだった。

富山県人は軍人約七二五〇人、民間人約二〇〇人が拉致されて約六〇〇人が死亡したとされ、城端地区では十人前後の死亡があったと推定される。シベリアに抑留された邦人は容易に帰国が許されず昭和二十二年四月より漸く一部の集団引き上げが始まった。

金戸では独立混成第九旅団の**盛田豊之助**が極寒のシベリアに抑留され、鉄道建設に使役されたが、昭和二年初めに無事に帰還している。

本土防衛部隊

第三十五連隊が満州へ移動し、**第六十九連隊**がトラック諸島へ派遣

されて、富山には留守隊が残るだけであつたが昭和二十年には本土決戦の準備が始められた。終戦時の富山県に駐屯していた第二〇九師団の「加越部隊」や二百二十九師団の「北越部隊」が防衛の警備していたが、八月一・二日の富山空襲に遇つた。

富山県駐屯以外では関東地方七県を作戰地点として、千葉県下に駐屯していた第九十三師団があり、同じく千葉県九十九里浜沿岸にあつて本土防衛に就いていた第五十二師団があつた。金戸では**杉本外次郎**・**森井信一**が配属していた。

その他の師団・連隊

金戸の入隊者の多かつたものに第二十一師団があり南方を転戦して

いる。第二師団は、日中戦争勃発後の昭和十三年四月に編成され中国大陸で転戦し、昭和十六年十二月から北部仏印に転用され第二次バターン半島攻略戦に参加しハノイで終戦を迎えている。また独立混成第九旅団と野砲兵第九四聯隊に**山本孝作**が従軍し一〇年も兵役に就いていた。

太平洋戦争に入ると師団・旅団・連隊の編成は無茶苦茶になり入隊した者もハッキリとした認識もなく従軍して

いたようだ。富山入隊後に特殊な技術を持つていて、また現地で臨時に混成編成された部隊がいかにも多かつたことと驚かされる。しかし全く無謀で全滅に近いインパール作戦に従軍した**梅本孝作**が所属していた連隊などが『富山連隊史』には全く記されていない。

金鷄勳章

明治二三年の旧紀元節に制定された軍人に授与された勳章である。

神武天皇の軍が道に迷つたとき、天皇の弓に金色の鷄が止まつて先導し、先勝を得たという故事にちなみ、金鷄と古代兵器とを形どり、綬は緑色の地に白い双線が入つていた。功一級から功七級までの階別があつた。

金戸でシナ事変に工兵として従軍した**江久吉**が渡河作戦の功により授与されている。近年他界されたとき葬儀式の靈前に奉安されていた。



功七級金鷄勳章